

# Glocal Tenri



4

月刊 グローカル天理 Monthly Bulletin Vol.25 No.4 April 2024

天理大学 おやさと研究所 Oyasato Institute for the Study of Religion, Tenri University

## CONTENTS

- 巻頭言  
神殿を見学する  
／井上 昭洋 ..... 1
- 文脈で読む「身上さとし」(12)  
明治 21 年 6 月～ 12 月  
／深谷 耕治 ..... 2
- ライシテと天理教のフランス布教 (35)  
21 世紀のライシテと天理教のフランス布教 ⑤  
／藤原 理人 ..... 3
- 英語文献にみる天理教 (3)  
*The Church at Home and Abroad* (1)  
／尾上 貴行 ..... 4
- 音のちから—中国古代の人と音楽 (19)  
出土楽器が語る音の世界—歌鐘・行鐘—  
／中 純子 ..... 5
- ヴァチカン便り (67)  
子宮の貸与は許されるのか—ローマ法王の最近の談話から  
／山口 英雄 ..... 6
- 図書紹介 (136)  
室井光広著『エセ物語』  
／金子 昭 ..... 7
- 2023 年度おやさと研究所 特別講座「教  
学と現代」のお知らせ ..... 8

## 巻頭言

### 神殿を見学する

おやさと研究所長 井上昭洋 Akihiro Inoue

私は天理大学でいくつかの科目を教える。その 1 つにフィールドワークの方法論がある。この授業では、フィールドワークの重要なテクニックである参与観察について、その初歩だけでも経験してもらおうべく、毎学期、学生たちを天理教教会本部の神殿見学に連れていくことにしていた。参与観察とは、ある社会的な空間に主体的に参加しつつ客観的に観察するという方法である。神殿見学の場合、神殿で参拝しつつ、神殿内の様子を観察することになる。神殿、教祖殿、祖霊殿を参拝して周り、建物の構造や殿内にいる人たちの行動についてつぶさに観察して短いレポートを書くのが、その日の課題だ。

観察することは簡単そうに思えて、案外難しい。見学にあたっては、当たり前と感じられることを意識して書き出すように学生に指示し、レポートを書いた後に、「私たちは何を見ているのか?」「私たちには何が見えているのか?」について振り返ってもらうことにしている。どんなに当たり前のことでも一から全て書き記すのは骨の折れる仕事である。見慣れた風景では当たり前のことを見落としがちだ。学生の中には、天理高校の卒業生もいれば全くの未信者の者もいる。神殿見学で得た情報を当たり前のことも含めて書き出すという作業は、見るもの全てが新鮮に映る後者の学生のほうが有利である。

未信者の学生であれば「神殿は二階建ての建物で、一階は下駄箱とトイレで、二階が礼拝場になっている」と書いたりするが、信者の学生で神殿が二階建ての建物であると指摘する者はまずいない。賽銭箱の数の多さについて指摘するのも決まって未信者の学生だ。ただし、「たくさんの賽銭箱がある」と記すだけでは不十分で、できれば賽銭箱がどこに幾つあるのか、どのように設置されているのかを記すのが良い。また、信者の学生であれば「神殿の上段には鳴り

物が置いてある」、「神殿中央に甘露台が据えられている」などと記すが、未信者の学生だと「板の間に大きな太鼓と小さな太鼓が置いてある」、「中央に木製の六角柱の置物が置かれている」と記したりする。どちらがより詳細に観察記録を取っているかは明らかだろう。翌週の授業では、同じ時に同じものを見ているはずなのに、経験や立場が違えば同じように見えていないということを解説し、どんな当たり前のことでも意識して書き留めることが参与観察の基本であると教える。

人の行動についての記述としては、「廊下で膝当てをして四つん這いになり、歌いながら雑巾がけをしている人がいる（「みかぐらうた」を歌いながら回廊ひのきしんをしている人がいる）」、「靴べらを持った男性が靴べら使いますか?と聞いてくる（境内掛の人が靴べらを使うかどうか尋ねてくる）」、「背中に天理教と書かれた黒いハッピを着ている人がいる（参拝者にはハッピを着ている人とそうでない人がいる）」といったものが定番だろうか。「正座をしてレゲエのような歌を歌いながら手を振っている人がいる」と書いた未信者の学生がいたが、相当にクセの強い歌い方で座りづとめをしている人がいたのかもしれない。

ある時、「廊下では信者さんから何度も挨拶される」と書いた学生がいた。二十数名の学生を引き連れての神殿参拝なので、他の参拝者から見れば、未信者の社会見学としての参拝であることは一目瞭然だ。それと分かって挨拶してくれたのだろう。ただし、挨拶してくれたその人が殿内ですれ違う他の参拝者にも同様に挨拶しているのかどうかは分からない。いずれにせよ、神殿の中は、親神の元に帰ってきた一れつ兄弟姉妹が集う陽気ぐらし世界を象徴する空間である。誰とでも挨拶をすればそのことが実感できるはずだ。